# 南方世界の儀礼食（芋）から

南山大学人類学研究所
後　藤　　明

## はじめに

私は専門がフォークロアではなくて、民族学あるいは文化人類学人類学、とくに民族考古学が専門です。フィールドは東南アジアからオセアニアです。日本の民俗学と関係づけるとすると、かつて若干読んだイモ文化論ではないかと思います。実は私の専門とする南方世界はイモが主食の文化なのです。東南アジアでは稲作が入ってきたり、そのあと宗教的にはイスラム教とかヒンズー教とかキリスト教が入って文化が重層化して、なかなか純粋に見えにくいのですが、今日お話しするもっと南の、メラネシアとかポリネシアの南太平洋の世界は、今日に到るまでイモが主食です。まさにイモ文化がかなり純粋に残っている地域でありますので、日本のイモ文化を考える上で何かヒントを与えることができるだろういうことでお話を聞いていただければと思います。

私の専門にしております地域は、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアといわれます。ポリネシアはハワイ、イースター島、ニュージーランドに囲まれ世界です。これらに連続するのが台湾、フィリピン、インドネシアの島々で、この世界はオーストロネシア（オーストロは南、ネシアは島)、南方語族という同じような系統の言語の広がっている地域です。つまり北は台湾の原住民から東はハワイ、イースター島などまでの 2 万 km ぐらいにわたって、同じ系統の言語が話されています。当然人類がアジアのほうから渡っていったわけですが、彼らは移動と共にアジア原産の種々のイモを持って移動していったのです。

## 台湾蘭嶼島のタオ族

同時に豚とか犬とか鶏のような家畜を持って行っている。しかも起源地が台湾で、日本に極めて近いところですから、日本と全く無関係とはとても考えられない。本当に隣の地域であります。一言で言うとここの文化はイモと豚の文化と言っていいと思います。もちろん魚はたくさん食べるのですが、ハレの食べ物あるいは儀礼の食べ物とすると、やはりイモと豚なんですね。これは台湾の蘭嶼島のタオ族（昔はヤミ族と呼ばれた）の人達の村の周りで作られているタロイモ、日本のサトイモと同じ *Colocasia esculanta* という種です。これが水田の中に植えられている写真です［図 1］。そして食生活を見ればイモと魚、また今はサツマイモがだいぶ多くなってき

図１　台湾蘭嶼島のタロイモ畑［撮影筆者］

図２　タオ族の儀礼：手前ではタロイモ分配、背後では豚の解体［撮影筆者］

ていますが、干し魚を食べます。そして儀礼・お祭りとなればタロイモ（＝サトイモ）と、豚を殺してみんなにふるまう。まさにイモと豚の文化というのが今でも続いてきているわけです［図２］。

## ハワイ・ポリネシアのタロイモ

タロイモ（*Colocasia esculanta*）は人類の移動と共に台湾からずっとハワイ、イースター島まで伝わっているという驚くべき事実があります。この写真はハワイのタロイモ水田で、遠くから見ると稲作水田に見えますがサトイモのような葉が生えており、これはだいたい３～４か月で生育します。作付け時期をずらすことによって１年中利用できるという形になっています［図３］。因みにハワイにはタロイモの起源に関する面白い神話があります。最初の男と女の神がいました。２人は交わって娘を生みました。ところが男の神、お父さんが娘と交わってしまいます。当然それは近親相姦で、間違った交わりでありますから、生まれた子どもは死産でした。これはイザナギ・イザナミの最初の話でヒルコの話とよく似ています。ハワイでは誤った交わりから生まれた生み損ないの子どもを家の前に埋めた。するとそこから何か生えてきたのがタロイモである。次に男神と女神が交わって子どもが生まれ、それからハワイ万民が生まれた。死産の子を埋めておいたところからタロイモが生えてきたということですから、ハワイの民にとってタロイモはお兄さんにあたるということです。自分達の祖先とも言えます。ハワイ語では血縁で繋がっているということを、タロイモの蔓で繋がっているという表現をします。イモが血縁の強さのメタファーにもなるのです。イモがいっぱい生るのは子孫繁栄の象徴です。それぐらい彼等にとってイモ文化の中心的な存在であり、それが日本のサトイモと全く同じ種類のイモです。食べ方は蒸かして食べますが、特にハワイではポイと言いまして、臼と杵でついてドロドロにしたものを啜って食べるのがハワイの主食になっています。

図３　ハワイ・カウアイ島ハナレイ地区のタロイモ水田［撮影筆者］

またポリネシアの辺境イースター島に行き

ますと大変土地が痩せていて、1本も川が無くて乾燥が激しいので、写真のように石で囲んで大事にタロイモを育てる［図4］。いずれにせよ台湾から2万kmぐらい離れた地球の裏側まで同じ種のイモが植えられていて文化の中心をなしているというのは、大変驚くべき事実です。

図4　イースター島の岩陰遺跡でのタロイモ栽培［撮影筆者］

今言いましたのはいわゆる海のモンゴロイドの移動ですが、台湾からフィリピンを通って5千年前くらいに移動が始まり、おそらくニューギニア島の北を通ってフィジーというところまで行ったのが3千年前くらい、ちょうど弥生時代の初め頃です。さらにミクロネシアから中央ポリネシア、東イースター島、それから北のハワイ、ニュージーランド、というように渡っていった。彼らは先ほど言いましたようにタロイモや、それからあとでお話ししますヤムイモ（ヤマイモ系です）とかバナナとかいった作物と、豚、犬、鶏などの家畜を持って、何万キロも移動していきました。

彼等はアウトリガーという補助輪のようなものを付けたカヌー（刳り舟）で、荒海を渡っていったのだろうと思われます。これはミクロネシアで今でも使われている伝統的な航海カヌーで、何千キロも航海することができます［図5］。私が総合監修をやって（2013年）10月11日にリニューアルオープンした沖縄の海洋文化館という博物館では、このカロリン型のカヌーを実際に作ってもらって展示もしています。ポリネシアでは双胴の大型カヌーが作られ、二本並んだ船体の間に甲板を作りそして小屋を作りました。小屋があるからこそこの中にタロイモの苗やヤムイモの苗や豚などを積むことができたのでしょう。

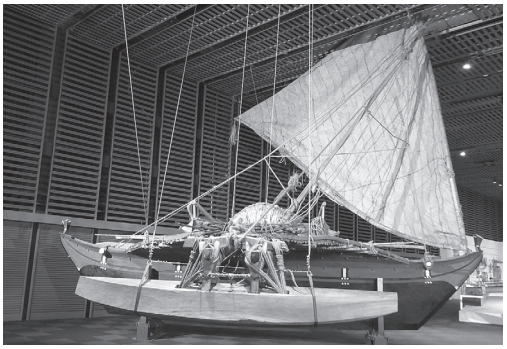

図5　ミクロネシア・カロリン諸島の航海カヌー（海洋文化館蔵）［撮影筆者］

## ソロモン諸島の貝貨とヤムイモ

メラネシアのソロモン諸島でガダルカナルという島がありますが、その隣のマライタ島が私の調査地の1つなので、そこの紹介をさせていただきます。ハレの食物です。彼等は日常的にはココヤシの実をむいて、中の果肉を採ってそれを調味料にしたり、ジュースを飲んだりしています。あるいはマングローブと言われる植物の種、いろんな種類があるのですが真ん中のオクラみたいなのが食用なのでこれを食べたりもしています。彼等の主食は、イモと野菜やココヤシミルクそれから魚ということになっています。今の主食はサツマイモです。また西洋人以降に入ってきた作物にキャッサバがありますが、伝統的なものではありません。したがって儀礼の対象にはなりません。

サツマイモの原産はご存じかと思いますが南米です。アジアではないのです。南米起源のサツマイモがどうして南太平洋に入ってきたかはいまだ謎であります。有名なハイエルダールという人がコンチキ号で南米からポリネシアに渡ったのを証明しようとした理由の1つが、サツマイモです。サツマイモはおそらく南米から持ってきたのだろうと。南米起源であるのは事実ですが、どういうルートでこちらのほうに入ってきたかは未だ謎です。またキャッサバもサツマイモも新しい。そんなに古くない。なぜならば今からお話しするタロイモあるいはヤムイモのように神話や儀礼がないのです。これはおそらく歴史の深さと関係するのではないかと思います。

さて調理法は石蒸し炉と言いまして、石焼きイモのようなイメージです。石を焼いて中に入れて芋や魚を置き、上からタロイモの葉をかけて蒸します。これは日常的な食べ方ですが、実は別の調理法があります。これがまさにハレの食べ物で、木の臼の中で棒でついて潰すのです。これをおはぎぐらいの大きさにして、それにココヤシの果肉を炒った香ばしいのをまぶして食べるのです。さっきサトイモ饅頭が出てきて似てるなと思って見ていましたが、こういうものをハレの食料として作ります。結婚式やその他のパーティー、最近だと彼等は一クリスチャンなので土曜の夜に作って日曜の安息日にこれを食べますので手間をかけるハレの食料であるということを言っていいと思います。

実はこのソロモン諸島のマライタ島というのは、今でも貝貨を使っている地域です。貝貨は何になるかと言うと婚資（女性をお嫁にもらうための結納）になります。今でもこのような貝を削ってビーズにして並べて、いわゆる貝貨を使っています［図6］。写真は婚資支払いの儀礼、結納の儀礼ですが、決まった数の貝貨を女性側に払わないとお嫁さんに来てもらえないという風習が今でもあります。

図6　ソロモン諸島・マライタ島の婚資支払い儀礼
［撮影筆者］

貝貨はもう1つ香典に使われます。この地域の言い伝えでは実際に沖のほうに見える島が死者の島だと言われています。死者は海岸からカヌーで島に渡してもらわないと成仏できないという考え方があって、その時に貝貨を充分持ってないとカヌーに乗せてもらえない。それから入れ墨をしているかどうか。これは痛みを伴う入れ墨を身体に入れてないと本当のその村の部族の人間ではないという。もう1つは豚を何頭殺したかと聞かれる。豚は儀礼の時にたくさん殺します。その人が死んだ時にもたくさん豚を奉納してもらいます。生前にはその人のお父さんやおじさんが親族の結婚式や葬式に奉納した豚に見合うだけの数です。つまりその人が生前どれだけ社会に尽くして信頼があるかという証拠なのです。その3つの条件があって初めて成仏できるという仕組みになっているのです。

脱線していましたが、このマライタ島で、貝貨で交換できる物品が3つあります。1つはカヌーです。もう1つは豚です。3番目はヤムイモなのです。貝貨1本とヤムイモが千個と決まっていて、そのヤムイモ千個というのは特別な呼び方があります。貝貨というのはお金ではありますが、単なる小銭見たいなものじゃなくて、文化的に重要なものとしか交換できない。それが女性（お嫁さん）。それから香典（死者の国に行く通行税）。物品としてはカヌーと豚とヤムイモ千個というのが決まっています。嫁もカヌーも豚もきわめて重要な文化要素です。それにヤムイモが

含まれているというのは、ソロモン諸島の社会ではヤムイモが文化の中心的な役割を担っていることを窺い知ることができるわけです。

結婚式のとき、豚を男達が調理し、女達がイモを調理しているという、まさに台湾の原住民と同じようなイモと豚の文化が連綿と続いてきているという写真をお見せしたいと思います［図７］。さっきタロイモのことを話しましたが、タロイモは日本のサトイモと同じ種類と、もう２種類ありまして、そのうちの１種類がこれです。*Cyrtosperma chamissonis* という種類で、スワンプタロあるいはジャイアントタロという巨大なタロイモです。これなんかは犬の頭ぐらい大きくて、儀礼の時に女の人達がむいて、ヤムイモやタロイモを結婚式の食料として大量に女達が調理し、男は豚を調理するという男女の分業です。大きな石蒸し炉が作られて、ここでイモや豚を調理します。たまにしか豚は食べられませんから、このときはものすごくみんなテンションが上がってきて、本当にハレの食べ物であるというのが分かります。イモもたくさんあるけれども伝統的なタロイモ系かヤムイモ系のイモおよび豚というのが、やはり彼等の生活の中で根幹を成しています。

図７　マライタ島の結婚式の準備：手前で男が豚の解体、背後で女たちがイモの調理と石蒸炉の準備　［撮影筆者］

## トロブリアンド諸島のクラ交易とヤムイモ祭り

残りの時間は映像をお見せしたいと思っております。ソロモン諸島よりもややニューギニア寄りの、文化的には大変類似しているニューギニア・トロブリアンド諸島というところがあります。文化人類学をやってる人間ならたいへん有名なマリノフスキーという人類学者がおります。近代人類学の祖と言われます。彼はクラという有名な儀礼的な交易活動について調査をしたことで有名です。その交易はだいぶ形骸化していますけれども今日まで行なわれてきております。交易自体は貝殻の飾りを交換する儀式なのですが、それと実はイモ、ここで言うとヤムイモですが、大変密接に関係しています。そこで文化の中でイモが持っている重要性を日本の研究においても何かヒント、示唆が得られないかなということで最近できました映像をお見せしたいと思います。

クラという行為は２種類の財宝（首飾りと腕輪）を隣の島と相互に交換する風習です。トロブリアンド諸島というのはマッシム地方の円環状にならぶ島々で作られたクラの輪の北に位置します。首飾りは島々のあいだで時計回りします。一方腕輪は逆に回るという大変不思議な風習です。２種類の飾りが常に逆回りに回っているのです。男達は危険を冒して隣の島に腕輪や首飾りを取りにいく。トロブリアンド諸島だったら腕輪を取りにいくのは東の島に行って持ち帰る。だから結果として腕輪は逆時計回りに回るわけです。一方首飾りは南の島に取りにいって持ち帰るから、結果として首飾りは時計回りにグルグル回ることになります。

クラ交易のためには普通のカヌーとは違う豪華に飾られたクラカヌーを遠洋用に使います［図８］。クラ交易というのは季節風によって航海に出る季節が決まっています。クラ交易が終わっ

て帰ってきた時は実はヤムイモの収穫期にサイクルが合っています。帰ってくると今度はヤムイモの収穫儀礼が始まります。次にヤムイモの収穫儀礼の映像をまたお見せしたいと思います。

これはお祭りです。少女達が持っているのはヤムイモです。畑から儀礼をやる村まで少女達が歌いながらヤムイモを運んでくることになっています。ヤムイモはこのようにきれいに積むやり方が決まってるのです。日本でも神饌を高く積むように、まさに芸術的に積む。これは普通の市場です。いろんなイモが売られているので解説します。これはサツマイモ、これがヤムイモです。バナナが置いてありますね。これはヤムイモです。立派なイモですね。男達はヤムイモの大きさで自分を誇示するのです。大きなヤムイモを作るのは大物の証拠であると。ヤムイモというのは男性のシンボルだとも言われています。ヤムイモの食べ方ですが、普通はこうやって皮をむいて煮て食べるんですが、儀礼になりますと先ほど言いましたように潰したりとか、他にいくつか調理法があります。ヤマイモ系なのでちょっと粘着質でトロロみたいな感じですね。もう少し甘いですが。

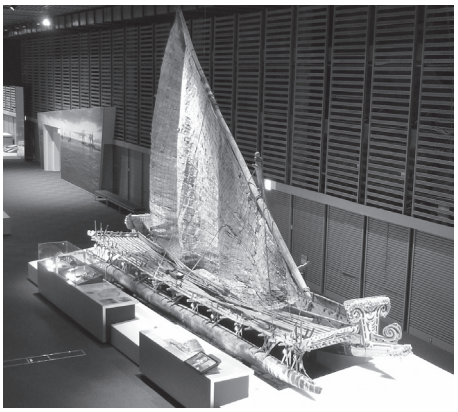

図８　パプア・ニューギニア、トロブリアンド諸島のクラカヌー（海洋文化館蔵）［撮影筆者］

ヤムイモを作る畑は粗放な焼畑です。基本的にヤムイモは蔓が上に行きますので、イモを植えてそこに蔓が巻くような棒を立てておくのですね。そうすると蔓が成長して下のほうに大きなヤムイモができます。タロイモはもっと湿気のあるところに植えますので、場所が違うかあるいは植え方が違ってきます。農具はほとんどありません。掘り棒だけです。本当に南方の農業というのはこれだけなのです。男はヤムイモをお祭りでみんなに見せなくてはいけないので、ほんとに大事にヤムイモを扱います。イモを愛でるという感じです。自分自身の分身でもあるからでしょう。身体の一部ぐらいに思って大事にするのかも知れません。刈り取ったあとに幾つか親イモを取っておいて植えて、そして棒を立てて蔓を絡ませる。

まず刈り取ったヤムイモは畑の側の東屋みたいなところに、円錐形にきれいに積んでいき、誇らしげに見せるわけです［図９］。これはあとでみんなに配ったりします。そのあとに先ほど見たように少女達があのイモを踊りながら村に持ち帰って同じような山を作って、そこで何日も歌と踊りの儀礼が始まる。それが終わりますとヤムイモ小屋に持って行きます。この小屋は校倉造りなのですけど外から見えるようにわざと隙間が開けてあるのです。そういう小屋が今でもたくさん建っています［図10］。これに入れておいて、自分の家ではこんなに立派なヤムイモがたくさん収穫できたというのを誇示するわけです。

図９　トロブリアンド諸島キリウィナ島にヤムイモ集積［M.W. Young *Malinowski's Kiriwina: Fieldwork Photography, 1915–1918*:, 1998: Plate 35より］

その前に先ほど見ましたような踊りの儀式ですが、これは結婚前の、子どもが産めるぐらいに成長した若い女の子達がヤムイモを村に

持って帰ってきて、同じように積んで、そして最後はヤムイモ小屋に入れます。祭りはこの踊りの時に他にも大事な意味があって、まず歌垣みたいなことが行なわれます。お祭りが行なわれる時には近隣の村からたくさんの人が訪れて来るのでそれに食料を振る舞います。そのことによって男が自分の威信を高めるわけですけれども、女の子を見て近隣の男達が見そめるわけです。そこで結婚相手を探すという意味もあります。

図10　キリウィナ島でのヤム貯蔵小屋
［撮影筆者］

さらにこの時期は祖先の霊が帰ってくるお祭りにも当たっています。すなわちお盆のようなもので、祖先が自分達の子孫を見守るために戻ってくる。それに対してやはりお下がり（本当に現地語でサガリと言うのですけれども）の食料を提供し、最後にまた死者の国に帰ってもらうということになります。考えてみますと男性のシンボルであるイモを、もう子どもが産めるくらいに成長した若い女性が肌も露になって持ってくるというところに大変エロティックな緊張感というかそういうものを感じざるを得ない。それはいったい何なのかと言うと、やはり土地の恵みたいたものがヤムイモに籠もっていて、次に社会を再生産させる女性達がそれを受け取って、大地の恵みを人間社会の恵みに変えていくような、そういうプロセスがあるのではないかと思うのです。

それからもう１つは、先ほど最初に言いましたクラカヌーの交易の直後にちょうどヤムイモの収穫祭があるということはどういうことか考えてみます。ある人に言わせると、クラ交易というのは海を越えた対外的な関係を作る行為である、つまり、クラの財宝は移動してくる。一方ヤムイモの儀礼というのはそれを受け取って、今度ヤムイモの小屋に最終的に蓄積するということによって、何らかの霊的な力を村に定着させる行為であるといいます。事実このオセアニアの社会では、船を作る技術と家を作る技術は大変類似しています。両方とも男の仕事で、木の部材の縛り方もとてもよく似て、習得も同じような過程ですると同時に、移動（＝カヌー）してきたものを固定（＝家）するような対比される意味を持っている。いろんな意味でクラ交易ということとヤムイモの儀礼というものの連続性と対比性の両側面から理解できるのではないかと思います。

私はまた少し違った観点から考察をしてみまして、ヤムイモをあのように大量に蓄積するということは、一種の豊饒性の蓄積だと思うのです。それが終わると今度は次の年のクラ交易の準備が始まります。ヤムイモの儀礼だと、ヤムイモを分配することで威信を得た男が次に今度大規模なクラをやるということでみんなが協力してくれる。クラ交易のためには当然それを率いる人間はいろんなものを提供しなければいけませんから、最終的に今度は消費されるわけですね。蕩尽と言えばいいでしょうか。つまり蓄積と蕩尽、そして海と陸、移動と固定。いろんな意味でクラ交易とヤムイモの儀礼というのは連続し対立するのではないか。逆に言いますとイモの儀礼食というのは単に食文化とかイモそのものの狭い範囲で終わらずに、彼等にとっては文化全体の中で１年間のサイクルの重要な一コマであると理解できるか、大きなシステムの一部として捉えられるだろう、ということを最近考えています。そのようにして見ますと、なぜ彼等は長いあいだイモというものを文化の中心として捉えてきたかということがよく理解できると思います。

佐野　後藤さんどうもありがとうございました。タロイモ、ヤムイモの、南太平洋の諸民族における象徴性、意味するところを中心に話していただきまして、日本を主にやってきているわれわれ民俗学にとっては大変参考になりました。これで午後の４人の方による発表をすべて終わりましてこれから総合討論に移ります。準備の関係もありますのでまた少しだけ休憩を取らせていただきます。４時10分に開始したいと思いますのでよろしくお願いします。